

◆式部省東方・東面大垣の調査 —第274次

1 はじめに

平城宮跡発掘調査部では壬生門（宮南面東門）東方の調査を継続的におこなってきており、奈良時代後半には式部省と神祇官が並立していたことがあきらかとなっている（第220・222・229・235・236・256・273次調査）。第274次調査は、その最終段階として、宮東南隅に近い部分で、東面大垣とその周辺の様相を解明するためにおこなった。これまでの調査によって、宮の東面には南面と同様に築地大垣が造営され、その東側に東一坊大路西側溝SD4951が、西側には宮内基幹排水路SD3410がそれぞれ南流していたことが判明している（第29・32・32補足・39・248-13次など）。

調査区は周辺から水が集まる旧谷筋地形にあたり、現在も遊水池として機能している。そのなかで、現在はつけ替えられたものの、近年まで里道として使われてきた南北方向の高まりは、大垣の遺存地形と考えられてきたため、良好な状態で検出できることが期待された。また、SD4951とSD3410から多量の遺物が出土することも予想された。さらに、これまでの調査でも検出例があるように、奈良時代前半の掘立柱塀による大垣の有無を確認することも大きな目的の一つであった。調査は4月1日に開始し7月25日に終了した。面積は約1800㎡である。

2 検出遺構

調査区の基本層序は、上から置土・耕土・床土・約70cmの遺物包含層となっており、この下の整地土面または地山面で遺構を検出した。

奈良時代の遺構

東面大垣とその添柱および堰板溝跡のほか、掘立柱塀2条、掘立柱建物6棟、溝5条、暗渠1基、道路1条、橋状遺構1基などを検出した。

SA4340 東面大垣。宮の東面を画する南北方向の築地塀で、調査区北端から南端付近まで48mにわたって検出した。南端は近代の攪乱により残っていない。置土ないしは耕土直下で築地本体、築地と犬走りの掘込地業、添柱列、堰板溝跡を検出した。足場穴は削平のためか検出できなかった。築地心の国土方眼座標は、調査区北端で $Y = -18,077.9$ 、調査区中央部で $Y = -18,077.8$ 。基底幅は2.7mと考えられる。下層に掘立柱塀は発見されず、平城遷都当初から築地塀であることが判明した。後述するように、大垣を開渠で横断する東西溝SD17650との関係で3期の変遷がある。

〈第I期大垣〉平城遷都当初に造られた築地塀。調査区中央やや北で後述する東西溝SD17650が貫流し、大垣が南北幅約6.2m開口する（開口幅は築地西側の数値。以下同じ）。

築地本体は黒褐粘質土（古墳時代の堆積層）とその下の地山を最大26cmほど掘り下げた掘込地業の上に、径3～5cmの礫や径0.5cm以下の礫粒を多く含む黄褐粘質土や黄灰粘質土、暗褐粘質土などを約5cmの厚さでつき固めたもので、残存基底幅最大2.62m、高さ最大0.7m残る。築地本体の残存が良好であるため、大垣の一工程あたりの造営長を知ることができた。水平に通る版築土の層には、南北

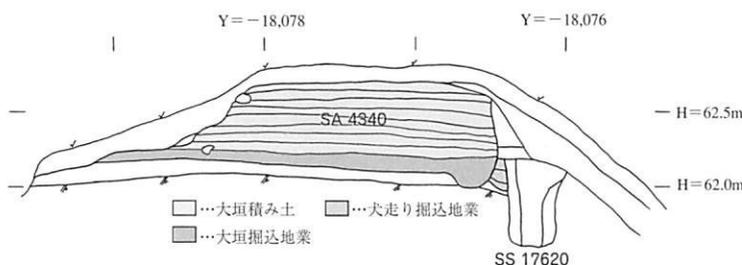


図2 東面大垣SA4340断面図 (X=-145,935付近) 1:50

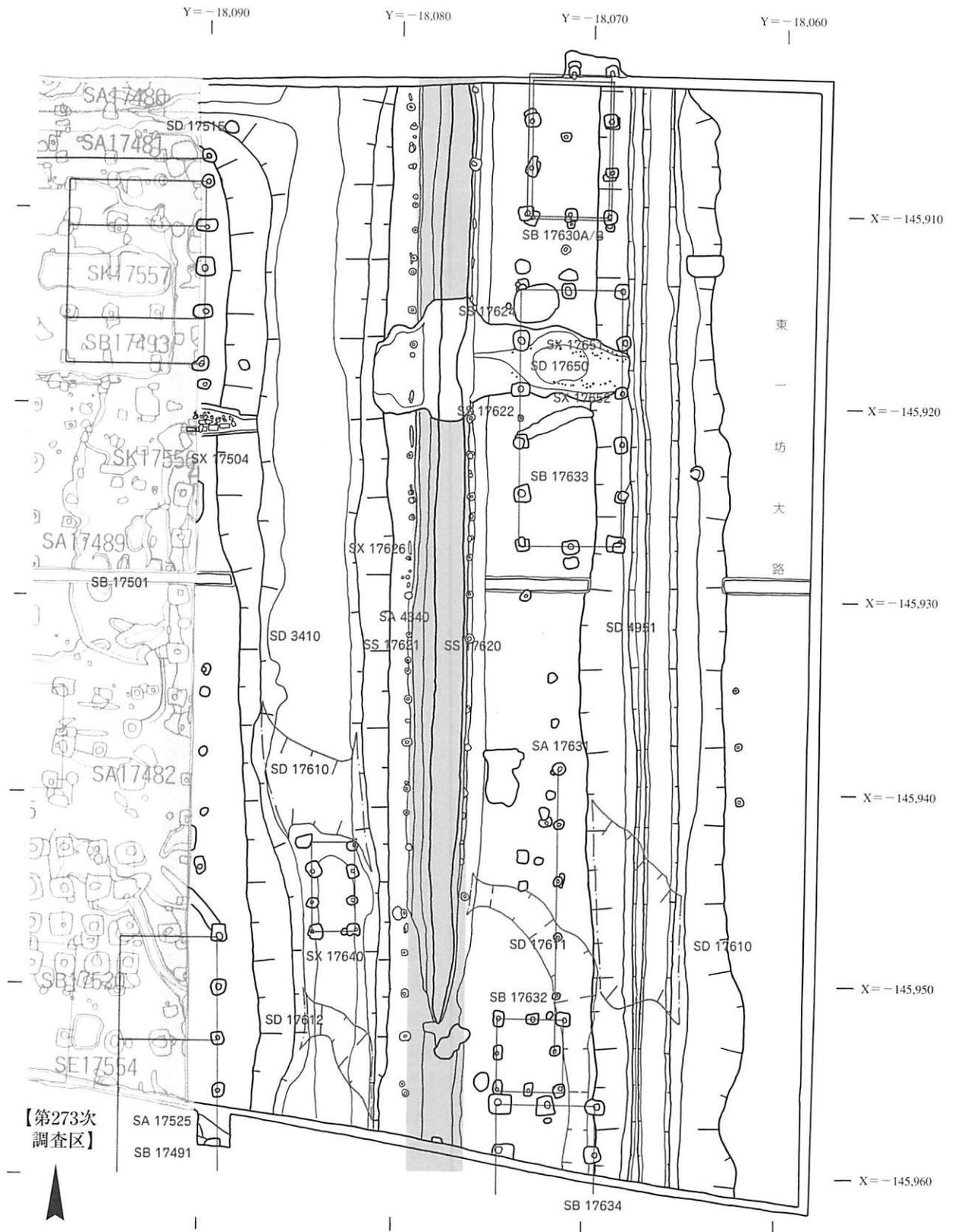


図3 第274次調査 遺構平面図 1:300

方向約2.1m(約7尺)毎に不連続面があって、その境に後述する添柱列SS17620・SS17621の柱穴がある。このことから、東面大垣における版築の施工単位は7尺と考えられる。また、犬走りの掘込地業を大垣東側で検出した。築地本体と同様に黒褐粘質土を最大28cm掘り下げ、黄褐土・暗茶褐粘性砂質土・黄褐暗茶褐混土を互層にした版築を施す。幅は最大50cm残る。築地本体の掘込地業が犬

走りのそれを切っており、築地造営は犬走りの掘込地業を施したうえで、築地本体の掘込・版築をおこなったことがわかる。大垣西側の犬走りは、調査区北半部では削平されて残らず、南半部で掘込地業を最大幅15cm確認した。大垣東側の甍地部分は削平のため原状は不明だが、調査区北壁で見ると甍地幅は約8.0mと推定される。

〈第Ⅱ期大垣〉第Ⅰ期大垣の開口幅を狭め、開口部以

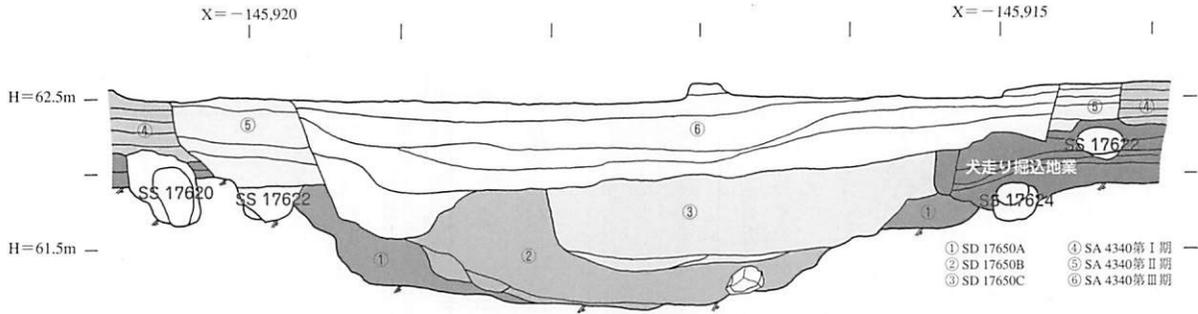


図4 SA4340とSD17650交差部分立面図（東からみる）1：50

南の築地端を北へ約1.3m、同以北の築地端を南へ約2.1mそれぞれ延伸させた大垣。掘込地業をともなわず、第Ⅰ期大垣に比べ粗雑な版築を施す。開口幅は約3.6m。

〈第Ⅲ期大垣〉第Ⅱ期大垣の開口部分を完全に埋め立てて連続させた大垣。第Ⅱ期大垣と同様に溝埋立土直上に版築を施すが、第Ⅱ期大垣に比べさらに粗雑な施工で、一層当たりの厚さは20cm前後、波状のうねりを呈する。

SS17620・SS17621 第Ⅰ期大垣造営時の大垣東・西の添柱列。柱穴の直径は約40cm、深さ60cm程度。両添柱列はばらつきがある。柱間寸法が約2.1m前後（約7尺）で、大垣を挟んでほぼ対になって検出した。ただし、これに合致しないものもあり、また改修にともなうものもあると思われ、それらについては判然としない。

SS17622・SS17623 第Ⅱ期大垣造営時の東・西の添柱。柱穴を4基検出した。

SS17624・SS17625 第Ⅲ期大垣造営時の東・西の添柱。柱穴を3基検出した。

SX17626 築地心から西1.4mの位置で検出した幅10cmの南北溝状の遺構。第Ⅰ期大垣造営時の堰板抜取溝。

SD17650A・B・C 調査区中央やや北にある、東面大垣を切り込むかたちとなって開渠で抜け、宮内基幹排水路SD3410から東一坊大路西側溝SD4951に注ぐ東西溝。西端の標高は61.15m、東端は60.70mと比高差は0.45mあり、水は西から東に流れる。南面大垣を抜け、二条大路北側溝へ流れるSD3410の水量を軽減するための分水路と考えられ、3期の変遷がある。

SD17650Aは当初の素掘溝で、幅5.5m、深さ1.5m。堆積土から須恵杯B蓋（平城宮土器編年Ⅰ期。以下、編年の時期のみ記す）が出土した。17650Aを埋め立て、幅を約2.9mに狭めた溝が17650Bで、築地横断部分の北岸で護岸石、南岸で護岸石抜取痕を検出した。SD17650Cは、SD17650Bを埋め立て、幅を約1.6mに狭めた溝。築地横断部分北岸で護岸石を確認したが、南岸については不明。

SD17650とSA4340の変遷だが、まず、SD17650Aはその埋立土が第Ⅰ期大垣積み土の下に潜ることから、第Ⅰ期大垣造営以前、遷都当初の開削と考えられる。次にSD17650Bは、埋立土が第Ⅱ期大垣の積み土にのるため、

第Ⅱ期大垣造営後のものと考えられ、SD17650Cは第Ⅲ期大垣造営のため埋め立てられて廃絶する。なお、SD17650Cの溝堆積土および埋立土から軒瓦6225A（平城宮軒瓦編年Ⅱ-2期～Ⅲ-1期。以下、時期のみ記す）やⅢ期古段階の土器が出土しており、SD17650Cの廃絶時期は天平10年前後と考えられる。従って、平城遷都直後、築地造営以前にSD17650Aが掘られ、第Ⅰ期大垣造営後も機能し、第Ⅱ期大垣造営後はSD17650B・Cが機能したが、天平10年前後に廃絶してそれ以降に第Ⅲ期大垣が造営されたと考えられる。

SX17651・SX17652 東面大垣とSD4951との間、SD17650北岸・南岸に並ぶ護岸の杭列。両杭列間幅1.2m。径約10cm、長さ最大80cm以上の杭を用いる。シガラミとして直径0.2～0.3cm、長さ40～50cmの木枝を部分的に確認した。SD17650B・Cにともなう杭列護岸である。

SB17630A・B 調査区北端、甍地部分にある桁行3間（8尺等間）×梁間2間（7尺等間）の掘立柱南北棟建物。同一の場所で建て替えており、古い方をSB17630A、新しい方をSB17630Bとする。SB17630Bの北妻柱掘形から須恵器蓋（Ⅱ期）が出土し、共に奈良時代前半期。

SA17631 甍地部分にある5間（10尺等間）の掘立柱南北塀。南端がSB17632と重複する。

SB17632 調査区南端、甍地部分にある桁行2間（6.5尺等間）×梁間2間（6.5尺、5.5尺）の掘立柱南北棟建物。SA17631と併存せず（新旧不明）、またSB17634より古い。

SB17633 甍地部分にある桁行5間（両端間8.5尺。中央3間は各9尺）×梁間2間（9尺または8.5尺等間）の掘立柱南北棟建物。SD17650の廃絶後に建てられ、またSB17634と東の柱筋がほぼ揃う。

SB17634 調査区南端、甍地部分にある桁行2間以上（柱間8.5尺）×梁間2間（9尺等間）の掘立柱南北棟建物。南妻は調査区外に伸びる。北妻柱掘形が北接するSB17632の柱穴を切っており、より新しい。

東一坊大路 調査区東端で路幅約4mぶを延長約58mにわたって検出した。路面は削平され、大路造営時の整地土を確認したにとどまる。

SD4951 東一坊大路西側溝。調査区北方にある小子

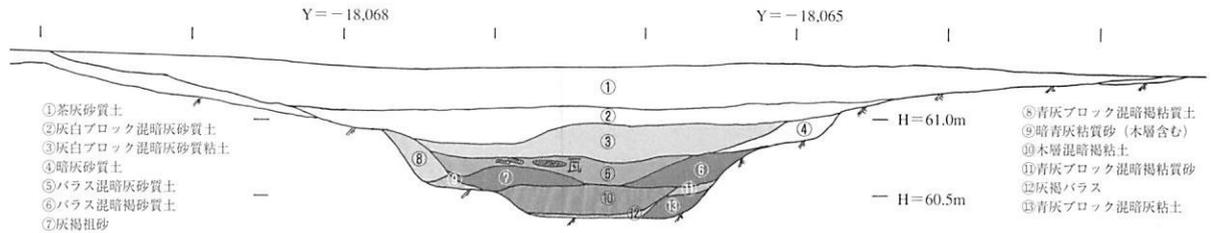


図5 東一坊大路西側溝SD4951断面図(②以下が下層堆積土) 1:50

門西脇を経て宮内から流出した排水路で、東一坊大路西側溝と宮東面外堀とを兼ねた南北大溝である。調査区東部を南北に流れる。幅約6.2m(最大約7.5m)、深さ0.8~1.4m、延長約56mぶんを検出した。溝心の国土方眼座標は調査区北部でほぼY = -18,066.6m、南部でほぼY = -18,066.3mで、調査区南方約50mでSD4951に架かる橋SX4020における溝心(Y = -18,064.8m。第32次調査)に比べてやや西にずれた数値を得た。護岸は検出しなかったが、西岸部分に、護岸施設の裏込めのための掘込みと思われる幅数10cmのテラス状の段を検出した。堆積は大きく上下二層にわかれる。上層は茶灰砂質土・暗茶灰砂質土で、平安時代以降の堆積。奈良時代の堆積土である下層は、幅約4m、深さ0.5~0.8m。溝は何度も改修を受けており遷都当初の堆積は残存しない。先述のSD17650を切る形で本溝が改修されていること、溝最下層出土木簡に天平宝字5年・6年の年記がみえることから、最下層が堆積することとなった改修時期は、天平中頃以降、天平宝字年間までと考えられる。堆積土は下から木屑混暗褐粘土、バラス混暗灰砂質土・灰褐粗砂、灰白ブロック混暗灰砂質粘土、灰白ブロック混暗灰砂質土の4層に大別できる。このうちバラス混暗灰砂質土層以下において、多量の遺物が出土した。

SD3410 東面大垣SA4340の西側を北から南に流れる宮内基幹排水路。幅6~7.8m、深さ1.1~1.3m、延長約53mぶんを検出した。SD3410に架かる橋状遺構SX17640(後述)以南では溝西岸が東に寄り、溝幅が狭まる。溝の堆積は上下二層に大別でき、上層の茶灰砂質土は平安時代以降の堆積。下層が奈良時代の堆積土で、幅5.3m、深さ0.65~0.8m。3~4期に区分できる。堆積土は、おおむね、下から灰褐バラス・暗灰粘土、暗灰粘質砂、暗灰粘質土・暗灰砂質粘土(白色粒・木屑含む)・白色粒混黒灰粘土(木屑含む)である。本溝も何度も改修を受け、平城遷都当初の堆積は残存しない。今回検出した溝最下層の年代は、軒瓦6133Da・6316F(Ⅳ期)や西大寺と記した木簡を含み、奈良時代後半と考えられる。最下層は素掘溝だが、後に小礫混茶灰粘質土や小礫混灰色粘質土を用いて溝幅を狭め、SX17640以南では幅3.4m、

深さ0.8m、同以北は幅約4m、深さ0.6mの規模となる。原位置を保つ護岸石を調査区南端の東岸で一ヶ所確認しており、兩岸に石積護岸を施したと考えられる。

SX17640 SD3410内にある桁行3間(約5尺等間)×梁間1間(約7尺)の橋状遺構。東北隅の柱は、北側に古墳時代の溝SD17610があるため、それを避けて桁行を1尺縮めて柱を据えている。柱根が6本残る。柱掘形は地山面で検出しており、SD3410最下層の堆積より古い。石積護岸の裏込土中に柱が埋没しており、この段階で機能を停止したと推測される。西方の第273次調査で検出した掘立柱南北塀SA17482は、本遺構と心がほぼ揃うため目隠塀とみることができ、SX17640は溝の水流を利用した便所遺構の可能性がある。

SD17515 調査区西北にあり、第273次調査で検出した神祇官北面築地の北雨落溝と、その北側にある宮内道路の南側溝を兼ねる溝。今回、石積護岸段階のSD3410に流入することを確認した。

SA17481 調査区西北にあり第273次調査で検出した掘立柱東西塀(8.5尺等間)。東端の柱穴1基を確認した。

SX17504 調査区西北にあり、第273次調査で西半を検出した神祇官東面築地を通る石組暗渠。今回、全体を検出した。凝灰岩4枚を底石に用いる。石組中に軒丸瓦6282Ba(Ⅲ-1期)を含む。SX17504を抜けた排水はSD17641を東流してSD3410に注ぐ。

SB17491 第273次調査で検出した調査区西南の掘立柱南北棟建物で調査区南方にのび、桁行4間以上(9尺等間)×梁間2間(8尺等間)であることを確認したにとどまる。

その他の遺構

SD17610 調査区中央部を西北から東南に流れる斜行溝。幅5.8m、深さ1.9m。SD4951およびSD3410溝底で検出した。古墳時代の溝と考えられる。

SD17611 調査区中央南部を流れる斜行溝。幅約2m、深さ0.3m。古墳時代の溝と考えられる。

SD17612 調査区西南部のSD3410溝底で検出した、断面V字形の斜行溝。幅約2.8m、深さ0.89m。遺物は出土しなかったが、形状からみて弥生時代前期の可能性はある。

(山下信一郎)

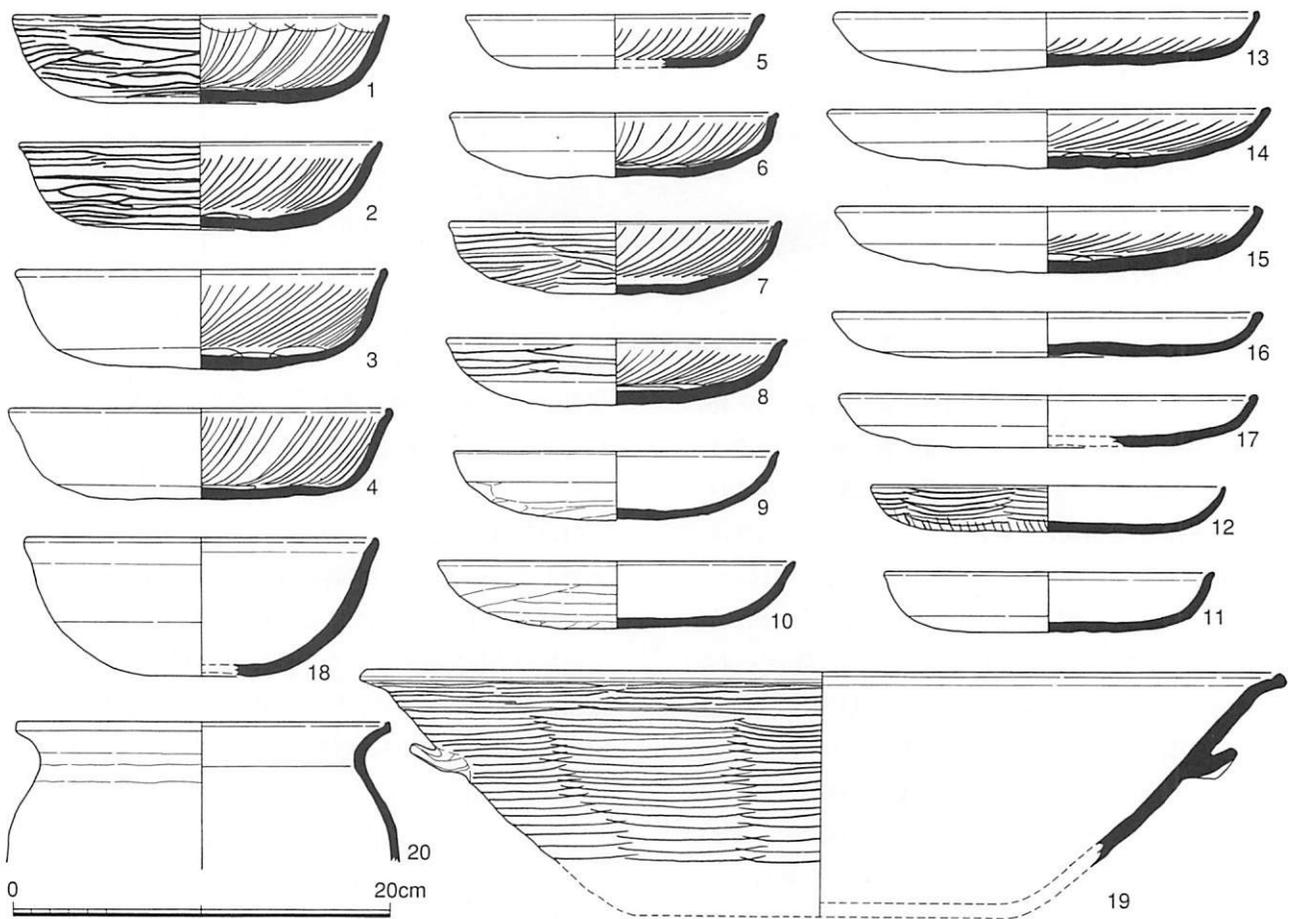


図6 SD17650出土土師器 1:4

3 出土遺物

土器・土製品

調査区内の溝から多量の土器が出土した。ここではSD17650出土土器を中心に、SD3410・SD4951出土の特徴的な土器・土製品について述べる。

①SD17650出土土器 ほとんどが東面大垣を閉塞する際のSD17650Cの溝埋立土から出土したもので、一括性が高いと考えられる。土師器、須恵器ともに多くの機種を揃え、平城宮土器Ⅲ古段階の好資料である。

土師器(図6) 杯A・杯B蓋・杯C・杯E・皿A・椀C・盤B・高杯・壺A蓋・甕・把手付双孔大型蓋が確認できる。全体に磨滅が著しく、調整、暗文などの観察が困難なものが多い。図示したものでは、杯Aの1点(4)がI群土器である以外は全てII群土器である。

1~4は杯A。1は連弧暗文をもつが、他は連弧暗文をもたない。全てa0手法で調整する。5~11は杯C。a・b手法ともに見られ、連弧暗文が確認できる例はない。7・8は口縁部外面にヘラ磨きを施す。12はC3手法で調整する杯E。13~17は皿A。a0手法で調整する。内面に放射暗文を施すが、暗文が確認できないものもある。18はe0手法で調整する鉢X。19はC1手法で調整する盤B。風化のため、内面の暗文の有無は不明。20は甕。風化が

著しい。9・11・12・16・18は灯火器として使用する。

須恵器(図7・8) 杯A・杯B・杯B蓋・杯C・杯E・椀B・皿B・皿B蓋・皿C・鉢A・高杯・鉢F・平瓶・壺A・壺A蓋・壺B・壺K・壺X・甕A・甕Cがある。28・35・46・53・58・63・69がII群土器、29・34・39がIII群土器、54がV群土器、43・60がVI群土器、24~26・30・31・33・72~76が群外の土器である以外は、全てI群土器である。とくに食器類は、杯B蓋に群外の土器が一定量見られるほかは、ほとんどがI群土器である。

45~59は杯A。杯A I 1 (45~48)・A II 1 (49)・A II 2 (50・54)・A III 1 (55)・A III 2 (56)・A IV 1 (57・58)・A IV 2 (59)がある。57・59以外は底部から体部外面下半にかけてロクロ削りを施す。58の底部外面には「下」の墨書がある。38~44は杯B。杯B I 1 (38・39)・B I 2 (40・41)・B II 2 (42)・B III 2 (43)・B V 1 (44)がある。底部外面をロクロ削りするものが多く、40の体部外面には「○」を墨書する。須恵器のうちで最も多量に出土し、その中でも口径の大きい杯B Iが多い。21~37は杯B蓋。21~26は杯B I、27~31は杯B II、32~34は杯B III、35は杯B IV、36・37は杯B Vに組み合う。ほとんどの個体は頂部外面をロクロ削りする。28の頂部外面には「蘇□□([蜜菓カ])」の墨書があり、25・32は転用硯である。60は椀B。口縁端部を削りで面取りする。

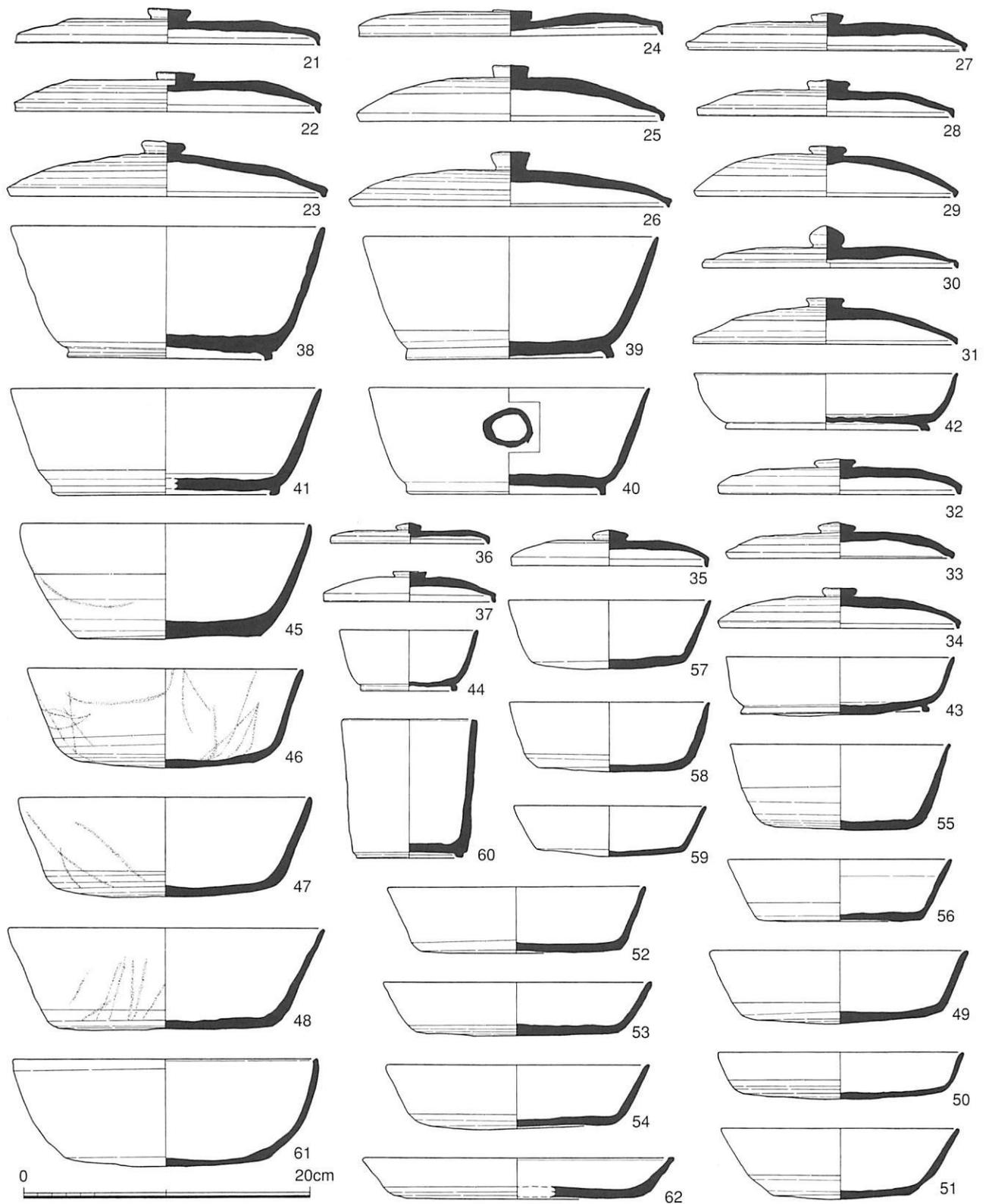


図7 SD17650出土須恵器① 1:4

61は杯E。焼成はやや不良で、底部はヘラ切りのまま。
 62は皿C。底部外面をロクロ削りする。65・66は皿B。
 底部外面をロクロ削りする。器高が5 cmほどの浅い器形
 と、7 cmを越える深い器形がある。63・64は皿B蓋。頂
 部外面をロクロ削りする。67は高杯。杯部外面をロクロ
 削りし、脚部にはヘラ状工具で透かし状の沈線を3ヶ所
 に入れる。68~70は鉢A。体部外面をロクロ削りし、
 68・70は口縁部外面を磨く。71・72は壺A蓋。73は壺E

で、全面に降灰が見られる。74・75は平瓶。体部外面を
 ロクロ削りする。74は小型品、75は大型品で、把手をも
 つ。76は壺X。長胴で肩が屈曲するあまり例をみない器
 形で、肩部の2ヶ所に把手をもつ。77は甕A。外面に格
 子目叩き、内面に当具痕を残す。

土器の構成と年代 SD17650出土土器は、土師器は保存
 状態が不良なものが多いものの、須恵器は保存状態が良
 好で多くの器種を揃え、貴重な資料である。食器類は法

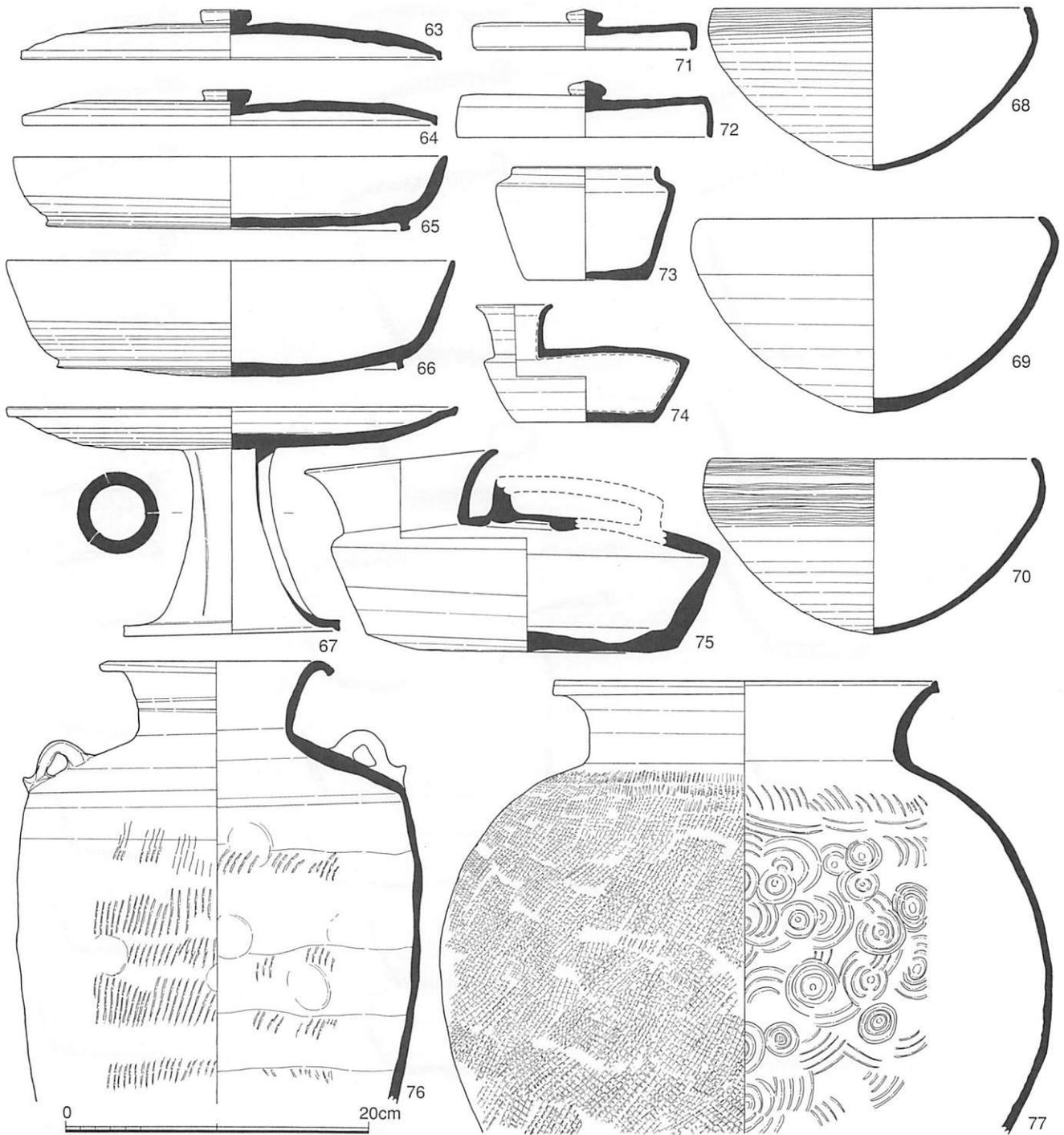


図8 SD17650出土須恵器② 1 : 4

量分化が厳格で、深い器形と浅い器形の双方をもち、宮廷の土器を代表するものと言える。この土器群は、土師器杯類の暗文や須恵器杯B蓋の口縁端部の形態、土師器、須恵器食器類の法量分布から、左京二条二坊、二条大路上の溝状土坑SD5100出土土器（奈文研『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』1995）と同じ特徴を示し、天平年間前半期（730～740頃）の平城宮土器Ⅲ古段階の年代が与えられる。これまでこの時期の一括資料は平城京内のものに限られ、平城宮内では良好な資料が出土していなかったが、今回初めて宮内での様相を示す資料を検出することができた。それとともに、東面大垣の閉塞時

期を示すものとして、その資料的価値は大きい。

②SD4951・3410出土土器・土製品（図9） 東面大垣東西にある溝SD4951・3410からは多くの土器・土製品が出土したが、出土量はSD4951が大量であるのに対し、SD3410はやや少ない。78・79・87～85はSD4951出土、80・87～92はSD3410出土。

78は風字硯。円弧状の突帯で陸部と海部を限る。周縁をほとんど欠失する。底部には濃緑色の自然釉が厚く降着し、脚がついていた痕跡がある。79は圈足円面硯。脚部を欠失する。80は低脚円面硯。破片のため、海部の有無は不明。81は同一個体の硯の2片で、周縁に突帯を付

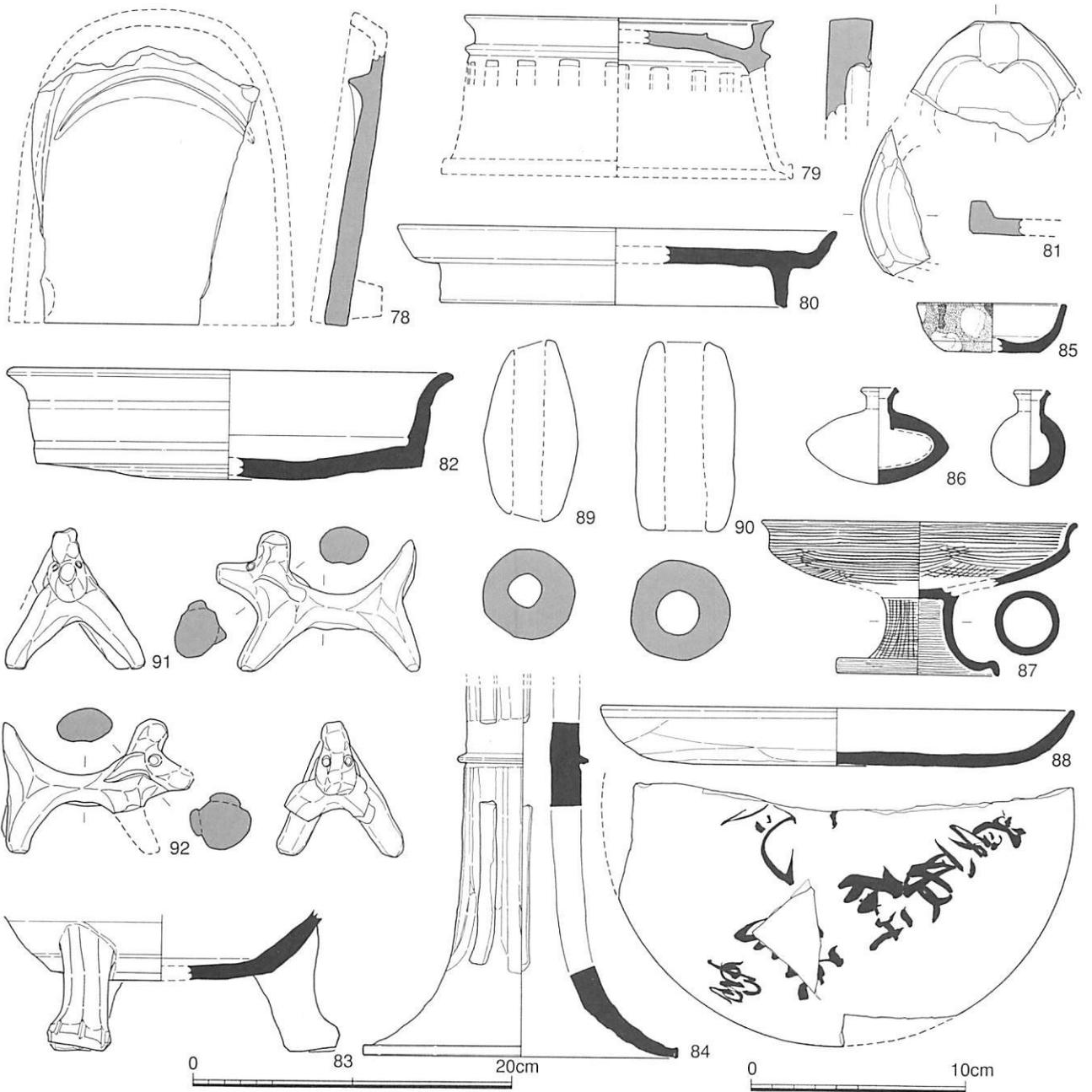


図9 SD4951・SD3410出土土器・土製品 (83・84は1:4、他は1:3)

し、頂部には突起がはがれた痕跡がある。宝珠硯になると思われるが、小型の形象硯になる可能性もある。82は須恵器火舎で、内面に煤が付着する。底部外面にはロクロ削りを施すが、小破片のため脚の有無は不明。83は獣脚の付く須恵器の底部で、壺Aになると思われる。獣脚は5本指で削りで整形し、底部外面にはロクロ削りを施す。猿投窯の製品で、内面には自然釉が降着する。84は須恵器の脚。大型で全体の器形は不明。脚部中央部に突帯を持ち、その上下に3方向からの透しを2段に入れる。脚部外面には縦方向の削りを施す。85は奈良三彩の杯。口径約7cmの小型品で、底部外面と胴部下端をロクロ削りする。外面に白、緑、褐色、内面に白色の釉を施す。86は須恵器の小型横瓶。猿投窯の製品で、自然釉が降着する。水滴として使用したもの。87は黒陶の高杯。同一

個体の口縁部と脚部の破片から図上復原した。ロクロ成形で、内外面ともに丁寧な磨きを施し、黒銀色の光沢を放つ。SD2700出土の黒陶(『年報1993』)と同様のもので、舶載品であろう。88は墨書土器。C0手法で調整する土師器皿Aで、底部外面に「莫取研□盤/□風」の墨書があり、硯の蓋として使用したもの。SD4951からは他に「北僧坊」、「朝」、「□支良女」、「近衛」、「□厨」、「西」、「狛」、「茹」、「□附名□」などの墨書土器が出土した。89・90は土錘。大型の紡錘形で、穿孔がある。棒状の軸を芯として2方向から粘土を貼り合わせて成形したと思われる、粘土の合わせ目で割れているものも多い。16点出土し、SD4951出土のものが1点ある以外は全てSD3410出土である。91・92は奈良時代末の土馬。土馬は計6点出土しており、この2点は同一工人が作ったと思われる

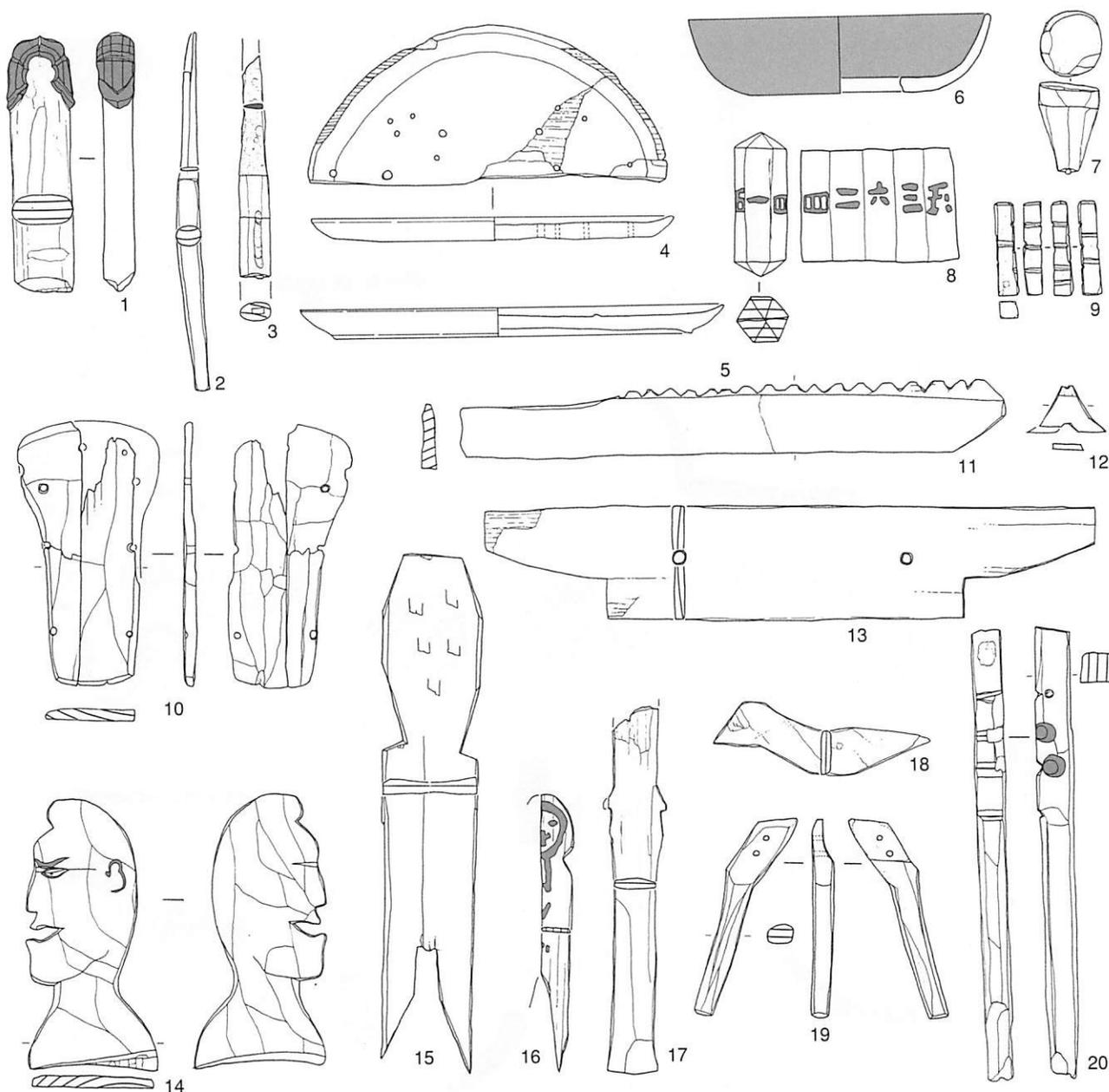


図10 第274次調査 出土木製品 1 : 3

同形同大のもので、近接して出土した。

その他、SD3410から墨書人面土器、小型模造竈が各1点ずつ出土した。(玉田芳英)

木製品

SD4951・3410を中心に1929点の木製品が出土した。加工板(102点; SD4951で68点、SD3410で20点)、箸状木器(349点; SD4951で321点、SD3410で15点)、棒状木器(1094点; SD4951で885点、SD3410で116点)などのほかは、比較的多種類のものが少数ずつ出土した。特記のないものはSD4951出土、ヒノキ製。1は刀装具の様。一木造りで太刀の鞘尻金具もしくは把頭の冑金を彫出し、金具部のみを墨塗りする。その他の部位は白木で削り痕以外の痕跡は確認できない。2は刀子形。一木で刀子を刃と柄を作り出す。極めて実物に近く、刀子の様の可能性もある。3は刀子。刃が残存。SD17650出土。柄は広

葉樹。4・5は挽物皿。いずれも縦木取り。4には多数の穴が開けられている。補修孔であろうか。SD3410出土。5はヤナギ属。6は漆器椀。両面に黒漆が塗られているが、布着せなどは確認できない。縦木取り。ケヤキ。7は独楽。芯持材を用い、先端には鉄釘を打つ。8は賽子。一〜六の漢数字を墨書。スギ。9は算木。SD17650出土。広葉樹散孔材。10は不明部材。両面を丁寧に削り、7ヶ所穿孔する。カヤ。11はすりざさら。SD17650出土。12は琴柱。SD3410出土。13は台座。同形のものが他に2点出土。SD3410出土。スギ。14~16は人形。14は横顔を切り抜いた後、目のくぼみを彫り込み、顎の輪郭線を刻んだ上、左向きの面のみ、墨で眉、眼、耳を描く。肩から下は折り取る。15は比較的大型のもの。顔面部には削り込みで目鼻を表現する。極薄い削り込みで両腕を表現するが、欠損する。スギ。16は墨書で顔を描く。左半身は欠損。17は

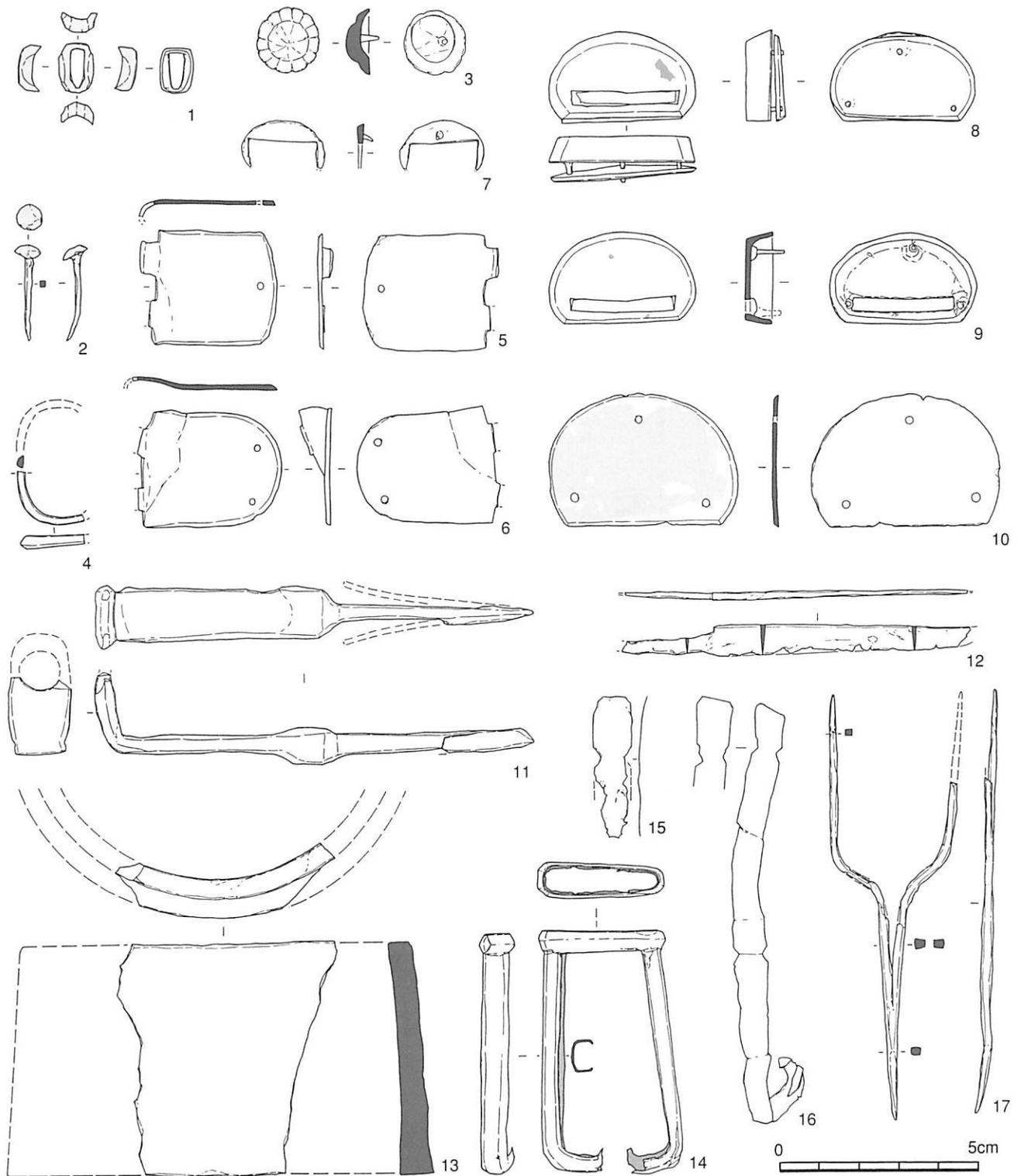


図11 第274次調査 出土金属製品（1・2・8～10・12・13・15・17はSD4951、3～7・11・14・16はSD3410、縮尺はすべて2：3）

太刀形。鏝と柄部が残存。18は鳥形。19は馬形もしくは牛形の脚部。胴部に木釘で固定する。これに対応する胴部としてはSD5100出土の牛形（奈文研『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』1995のPh.245）に類似するものを想定できる。20は火きり臼。スギ。（加藤真二）

金属製品

SD3410・SD4951からは、和同開珎・万年通寶・神功開寶の銭貨とともに、多様な金属製品が出土した。1は金銅装刀子把口金具。側面の刳込みは正倉院北倉三合鞆御

刀子にみられる形制である。2は金銅鏝。3は銅鏝で半球形の鏝頭に十三花を刻む。4～10は銅鍔帯金具。4は鉸具の弓金具、5・6は鉸板、7～10は丸鞘である。10は金銅装の裏金具で、幅4.7cm、高さ3.3cmの大型品。11は鍵（海老錠）牡金具。バネ軸が1本1段でバネが横位置につく形式のもの。バネと弦通し孔の上半を欠く。12は両面平造りの刀子。13は筒状鉄製品。東三坊大路東側溝、右京八条一坊十一坪で類品が出土しており、車軸受金具と推定される。14は銅大刀装具。鞆尻もしくは柄頭

軒丸瓦					軒平瓦						
型式	種	点数	型式	種	点数	型式	種	点数	型式	種	点数
6133	A	1	6282	B	7	6572	A	1	6666	A	1
	B	1		Ca	1	6641	Ab	1	6667	C	1
	Da	1		G	1		C	2	6681	B	3
	K	11		I	4		E	1		C	3
6134	A	2		?	3		F	1	6682	A	12
	B	1	6284	A	2		?	1	6685	A	2
6135	A	6		E	6	6642	A	3		C	1
	B	3	6291	A	5		C	1	6688	A	2
	C	1		C	2	6643	B	1	6691	A	3
	E	1	6304	L	1		C	2	6694	A	1
6138	B	2	6308	A	2	6646	A	1	6702	A	7
6151	A	1		B	1	6647	B	1	6714	A	1
6225	A	13		D	1		D	1	6721	C	7
	C	5		N	5	6663	A	5		Da	2
	L	1	6311	A	8		C	9		Fb	1
	?	1		Ba	5		H	6		G	9
6227	A	1		C	1	6664	C	2		H	9
6235	?	1		F	1		D	5		I	1
6275	A	1		?	3		F	9		?	3
	H	1	6313	A	7		Gb	1	6732	A	1
6278	?	1	6314	B	1		K	1	6760	A	1
6279	Aa	1	6316	F	1		I	1		B	3
6281	B	1	型式不明		66		L	2		型式不明	21
6282	A	1					?	1			
軒丸瓦計					193	軒平瓦計					154
※三彩1点含む											
丸瓦		塼		道具瓦・その他							
重量	2,547.0kg	重量	114.4kg	鬼瓦	6	刻印「修」	13				
点数	18,578	点数	171	面戸瓦	6	「理」	1				
平瓦		凝灰岩		隅木蓋	1	「中」	1				
重量	6,656.3kg	重量	8.6kg	緑釉隅木蓋	1	「真依」	1				
点数	41,966	点数	9	隅切瓦	4	「乙方呂」	1				
				篋書瓦	5	刻印瓦	1				
				塼斗瓦	6	瓦製円盤	1				

表2 第274次調査 出土瓦塼類集計表

の金具。I字状の銅板を角丸形に折り曲げて覆輪とし、約金は鑲接した可能性がある。15・16は銅製人形。16はほぼ完形で長さ14.2cm、側縁の2ヶ所に左右から三角形の切込みを入れ末端に肢をつくる。17は叉状鉄製品。なお、両溝およびSD17650より鉾滓と鑿羽口が、SD4951からは糸状の銅切り屑が出土しており、周辺に鑄造・金属加工に関わる施設の存在が窺われる。(次山 淳)

瓦塼類

瓦塼類は調査区内から大量に出土しているが、SD4951とSD3410からの出土品がほとんどで、元来どの遺構に葺かれていたかを知ることは困難である。注目されるものとして、SD4951灰白ブロック混暗灰砂質粘土層から、東院やその周辺で散見される緑釉軒丸瓦6151Aが出土した。また、SD4951灰白ブロック混暗灰砂質土より多量の平瓦が出土したが、これらはいずれもやや大ぶりで、凹面に模骨痕があり、布綴じ合わせ目が認められるものも存在する。粘土紐痕跡がみあたらないことから、粘土板桶巻き作りによる製品である可能性が高い。(清野孝之)

木簡

木簡は、SD17650から1,047点(うち削屑945点。以下同じ)、SD4951から3,018点(約2,600点)、SD3410から83点(63点)出土した。いずれも出土地点近くや上流の平

城宮内から投棄され、調査区で堆積した木簡が多いと考えられ、特定の史料群を形成しない、多様な内容をもつ。ただし、SD4951出土木簡には東一坊大路上から投棄されたものも含まれ、SD17650・SD3410出土木簡と性格を異にする側面がある点を考慮すべきだろう。

SD17650では、ほとんどSD17650B・Cの堆積層から木簡が出土した。時期的には郡里制からほぼ郷里制の時期におさまる奈良時代前半で、養老3年や同5年の年記木簡を含む。内容的には、伊豆・美濃・隠岐・伊予などの荷札や、人名を記載した木簡などが多い。①は内蔵寮が後宮女官の内侍の牒によって、繩、布、糸を支出、某所に進上した際の送り状である。内蔵寮は中務省に属して天皇の宝物や日常の物品を掌る官司。あるいは衣服を縫製するために材料を縫殿寮に進上した際の木簡か。その他に「中務省解」と記した削屑が出土している。

SD4951では、最下層の木屑混暗褐粘土層とその上のバラス混暗灰砂質土・灰褐粗砂層を中心に木簡が出土した。時期的には、出土荷札がいずれも郡郷制下のものであること、最下層に天平宝字5年や同6年の記年木簡を多く含むことから、SD4951出土木簡は、おおむね、天平宝字年間以降の奈良時代後半と考えられる。但し、年記が先の2ヶ年に偏る点はやや注意を要しよう。内容としては、食料・布・銭など物品を請求する木簡、伊勢・伊豆・安房・若狭・越前・出雲・播磨などの荷札、板・瓦など造営に関する木簡、銭の付札などがある。③は「草湯」の材料を請求した木簡。「草湯」が煎じ薬であるならば、請求者の吉田古麻呂は、吉田宜の子で奈良時代後期から平安時代初めにかけての医家として知られる吉田古麻呂と同一人とみなせよう。請求先は典藥寮か。④は酒の進上木簡。元日付けで珍しく、正月の饗宴儀礼に供する酒に関わるものか。同文で形状・書風がやや異なる木簡がもう一点出土している。⑤は6人の名前を連ねた歴名。そのうち「畠賢達」と「子部人主」は造東大寺司写経所に仕出した人物として、「紀東人」は藤原仲麻呂の資人として、それぞれ天平勝宝年間の正倉院文書に散見する人物名と一致する。同一人とみて時期的にも齟齬はないだろう。⑥は出雲国の荷札。「前分」は文献的には貢納物を収納する際の役人の手数料と言われるが、木簡の「前分」の語義については未詳。平城宮で「前分」と記した荷札木簡が出土したのはこれが初めてで注目される。⑦は嶋坊の倉の

